

一 次の文章を読んで、あとの間に答へなさい。

『万葉集』の歌が感動をそのまま表そうとするのに対して、『古今集』の歌は感動を「ひねりして言い表そうとする。すなはち、感動を、ある理屈の枠組みにはめこんで再構成するのである。ここで、題材のほど似通つた二集の歌を比べてみよう。

梅の花咲ける岡辺に家居れば^を乏しくもあらず鶯の声

(万葉・卷10・一八二〇) 作者不明

春たてば花とやらむ白雪のかれる枝に鶯の鳴く——(X)
右の二首は、同じく早春の梅と鶯を組み合わせて詠んでいたが、その詠みぶりは根本的に異なっている。前者の『万葉』の歌は、梅の花の咲いている岡のあたりに住んでいるので、鶯の声の聞こえることが少くない、の意。(1)

これに對して後者の『古今』の歌は、春になつたので鶯が雪を梅の花と見まちがえているのだろうか、白雪の降りかかっている梅の枝で鶯が鳴くのだ、の意。實際には春まだ浅く、梅の白い花が咲く以前にその枝に雪が降りかかる。いるが、そこに早くも鶯がやってきて鳴いている、というのが實際のところである。それを理屈っぽく「ひねりしたのが、この『古今』の歌である。この時代よく用いられる見立てや擬人法を用いて、鶯は白雪を白梅と見まちがえたのだろうか、としている。

鶯が春まだ浅いのに雪の降りかかる梅の枝で鳴いているという事実を、「……なので……なのだろうか」という理屈の枠組みのなかにあてはめて表現していることになる。事実が事実そのままとしてではなく、再構成されているのである。この歌ではそうした工夫を通して、待ちわびた春がもうそこまでやつてきたという感動を表している。雪の底から春が芽生えている、というように季節の微妙な移り変わりに気づいて、それを感動的に歌いあげるのも、この時代の季節の歌の特徴の一つである。

從来、『古今集』の歌の表現について、理屈っぽいという意味で理知的といわれたり、また感動の間接的な表現とか、あるいは観念的な表現とかいわれてきた。しかし、そうであるからといって、そのような表現には感動がこもっていないということには、かつてならない。右の「春たてば」の歌にも、生命よみがえる季節を待ち望む気持ちはふれられている。『万葉集』と『古今集』とでは、歌における感動のしかたが異なっているにすぎない。

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる——(Y)

(春上 紀友則)

これは、梅の花の香を、風を使者としてそれに添えてやり、まだ姿を現さない鶯を誘い出す案内役にしよう、ぐらいの意。ここでも、梅花の香がわしさや鶯を待つ気持ちをそのまま言うのではなく、擬人法の技法によって本来無関係な人事と物象を結びつけ、人を誘うに便りをもつてする人間社会の慣習に照応させながら表現している。そして、梅と鶯の取り合はせがいかに抜きがたく重要な事柄の原因理由について理屈をもって述べているところから、あらためて自然界の道理を思うことになる。

『古今』的表現の眼目ともみられる事実の再構成は、事柄がつねに、変化の動機や由因などの必然関係によつて成立しているという認識あるいは事実をその生起死滅の一齣として動態的歴史的にとらえようという思考を喚起するようになされた。ともかく、事柄の再構成という思考性が媒介的に作用して、生動する万物の道理、千変万化を促すところの規矩を見定めようとする。そのような思考の生み出す表現は、当然ながらきわめて觀念的である。次のように知られた歌、

ひさかたの光のだけき春の日に静心なく花の散るらむ——(Z)

(春下 紀友則)

も、再構成による觀念的な表現という特徴をよく示しているよう。「のだけき」と「静心なく」の(3)なひびき、そして「静心なく花の……」という擬人法的な表現があいまつて、ひとり静心なく散らねばならぬ不可思議さを思わず見るをえない。作者の内面にはかすかながら、静中の動、静止のなかの変化といふ、運命にも似た不可知の事象が発見されている趣である。不安な憂愁を正面からいうのではなく、爛漫の春を味わう悠々たる自然観照のかなたに、人間世界の深遠な理がすかすな翳りとして見つめられている。

(鈴木日出男『古代和歌の世界』)による

(注 素性 平安時代の歌人。 紀友則 平安時代の歌人。 規矩 平安時代の歌人。 紀友則 平安時代の歌人。)

(注 不二 富士。 富士山。 竹村茂雄 江戸時代の国学者。)

筑摩書房

一九九九年三月刊

1 次のうち、本文中の(1)に入れるのに最も適していることばはどれか。
一つ選び、記号を○で囲みなさい。

A 似通つた題材で詠まれた一首の差を端的に示している

B 春の情景に対して感動した理由が歌われている

C その歌ほど秀逸なものはないとも思ったが

D それほど秀逸であるとも思はなかったが

E 春の情景の実際がそのまま歌われている

2 生命よみがえる季節を待ち望む気持^チとあるが、本文中の(X)で示した歌では、この気持ちを具体的にどのようにして表現しているかとすることについて、本文中で筆者が述べている内容を次のようにまとめた。(1)に入れる内容を、本文中のことばを使って七十字以上、八十字以内で書きなさい。

(X)で示した歌では、_____により再構成し、生命よみがえる季節を待ち望む気持^チを表現している。

3 次のうち、本文中の(3)に入れるのに最も適していることばはどれか。

一つ選び、記号を○で囲みなさい。

A 重複的 イ 対照的 ウ 比喩的 エ 超越的

旅たてる頃、熱海の出で湯をいでて、弦巻山の頂へかかりしに、浮き雲西の空にたちかさなりたりしかば、ともなへる人にむかひて、不^一はいづくの雲のあなたにかあたりて見ゆると問ひしに、はるかにゆびざして、あしこの雲のうちにこそといふほど、いつしか浮き雲はれのきけるに、其の指さしをしへたる雲よりははるかに高く、空に聳えてふりあふぎ見るばかりなりしかば、さて其の時ぞ、師の歌をおもひ出でて、めで聞こえたりき。

(注 不二 富士。 富士山。 竹村茂雄 江戸時代の国学者。)

黄口し申し上げた

4 次のうち、本文中で述べられていることがらと内容の合うものはどれか。

A 本文中の(Y)で示した歌に自然界の道理を思うことになるのは、梅の花は鶯を説くために香ぐわくなるという理屈によつて、梅と鶯の取り合

わせがいかに重要であるかということが感じられるためである。

B 本文中の(Z)で示した歌は、その表現がきわめて観念的であり、爛漫の春を味わう悠々たる自然観照のかなたに、不安な憂愁だけではなく、人間世界の深遠な理がすかすな翳りとして見つめられている。

C 理知的といわれたり、感動の間接的な表現、あるいは観念的な表現と評されたりする『古今集』の歌の表現も、感動がこもっていないのではなく、

歌における感動のしかたが『万葉集』とは異なっているにすぎない。

D 『古今』的表現の眼目でもある事実の再構成は、事柄がつねに、変化の動機や因果などの必然関係によつて成立立つという認識や、事実を動態的、歴史的にとらえようという思考から喚起されることによつてなされる。

E 次のうち、今までの秀逸ともおもはざりしに、いにし文化四年、おのれ伊豆の出で湯あみがてら、熊坂の里なる竹村茂雄がもとへと心ざして

二 次の文章を読んで、あとの間に答へなさい。

吾が師の歌に、

こころあてに見し白雲はふもとにて思はぬ空にはるる不^二のね

此のうた、今までの秀逸ともおもはざりしに、いにし文化四年、おのれ伊豆の出で湯あみがてら、熊坂の里なる竹村茂雄がもとへと心ざして

3 (2) 師の歌をおもひ出でてめで聞こえたりきとあるが、本文において、筆者はどのようなことから、師の歌を思い出し賞賛したのか。その内容についてまとめた次の文の(1)に入る内容を、本文の趣旨から考えて、現代のことばで五字以上、十五字以内で書きなさい。

A 師 イ 竹村茂雄 ウ ともなへる人 エ 筆者

○

採点者記入欄

得点

番

受験番号

〈問題五を除く〉

二		1		2		1	
4	3	季節を待ち望む気持ちを表現している。ことにより再構成し、生命よみがえる				70	80
ア	ア						
イ	イ						
ウ	ウ						
エ	エ						
ア	イ						
イ	ウ						
ウ	エ						
エ	エ						

二				
3		2		1
15	師の歌に詠まれた内容と	C	B	A
こと。		ア	イ	ア
		イ	イ	イ
		ウ	ウ	ウ
		エ	エ	エ
5				

/14		/6		/4	/4	採点者記入欄

/21		/5	/4						/8	/4	採点者記入欄

四		4			3	2	1
ア	イ	ウ	エ	ア	ア	A	
イ	ウ	エ		イ	イ	B	
ウ	エ			ウ	ウ	C	
エ				エ	エ	D	
ものになるということ。				歴史が			
50							
60							

/23	/5											採点者記入欄

三		1					
2	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	
水							
濁							
則							
無							
シ							
掉							
ソ							
尾							
ジ							
之							
魚							
。							
コツ							
ホウ							
ソ							
シ							
彫							
呈							
塑							
する							
に							

/12	/3	/2	/2	/2	/1	/1	/1	採点者記入欄

(原稿用紙)

300	200	100
-----	-----	-----

- ・原稿用紙の正しい使い方にしたがって書くこと。
- ・題名や名前は書かないで、本文から書き始めること。

受験 番号	番
----------	---

/20

得点	
----	--

